愛知教育大学研究報告，53（人文・社会科学編），pp. 163～171, March, 2004

# 社会意識論をめぐる一考察

中筋由紀子
Yukiko NAKASUJI

地域社会システム講座

## 0：はじめに

本論は，戦後社会学における二つの代表的な社会意識論について，その分析が依拠するデータ空間の構成という視角から，再検討してみようとする試みである。

「社会意識論」は，日本の社会学の一領域として大きく発展を遂げてきた分野であり，それは特に戦後，標準化された質問紙による調査手法の導入と，統計学的なデータ解析技法の開発，高度化によって発展した分析技法の応用によるところが大きいとされる。こうした実証研究一般に応用可能な，基礎的な技法の発展によって，社会意識論は，一領域研究とされながら，その実証的な研究は，農村社会学，都市社会学，産業社会学，政治社会学，マスコミ研究などの多様な社会学の，ほぼ全領域から形成されたと言える広がりをもっている。

したがって，社会意識論についての再検討は，社会学の実証的な研究の主要な一つの技法についての，再検討の試みであると考えられる。この分野において，「量的データ」と「質的データ」をめぐる議論が展開され，数量的なデータに基づく分析の限界についての自覚から，多様な研究技法がそこから分岐，発展してゆく萌芽ともなったのである[1]。私たちは，二つの社会意識研究を取り上げることで，このような社会意識論における一つの展開を追ってみたいと考えている。後に詳述するが，このような展開の背景には，当時の日本社会に対する研究者の側の認識の変化とともに，調査対象の変化が調査技法の有効性を失効させたことがあると考えられる。例えば，こうした状況を佐藤健二は，「高度経済成長の大きな社会変動を経て，社会意識レヴェルにおける，暗黙の『共同体』もまた『解体』して行き，見えにくくなっていった」（佐藤，1985：p8）という表現で形容している。これらの点について，調査技法が前提としているデータ空間の構成という視角から，後に考察してみたいと思う。

ただし本論は，単にアカデミックな研究技法についての再検討ではない。後に考察するが，社会意識という概念は，社会を認識する手段としては，奇妙な概念である。そのような概念による社会分析にリアリティを与えていたのは，社会学という学問内部に限定されたことではなく，マス・コミによるアンケート等の一般化を見ても，調査分析の対象となった，社会の側でのそのような社会認識に対する接触の体験や，その定着の様相であったと考えられるのである。もっとも本論で検討できるのは，ここで取り上げる社会意識論の調査分析の戦略が，そうした調査対象となる社会の側からの認識について，どのように捉えていたのか，という視角から見えてくる部分に限られたものとなる。

また，本論は，社会学の実証的な研究の技法を，対話的な調査の技法という分野において再検討した「インタビューという技法について」という論文に続くものである[2]。従って本論は，その意味でも，社会学の実証的な研究技法の展開を追うという視点から，いわゆる「近代」の展開が，ミクロな社会関係の様態に与える変化について考察するという，これまでの研究の延長上に位置づけられるものである。

## 1：「社会意識」という概念について

ところで，こうした考察に入る前に，まず私たちは，「社会意識」という概念自体について，あらためて考えてみたいと思う。この概念は，社会学を学ぶ者にとっては，学説上も調査技法的にもまったく通常の領域のひとつとして（例えば家族や農村のように）学ばれるのであり，それどころか，マスコミや行政上のアンケート調査の普及した現在においては，「とりたててその定義を問題にすることもなく，漠然とした意味で日常的にすら用いられている」（宮島，1983→1976：p18）のであるが，実際には幾つかの点で，日常生活上の諸種の社会現象とは異なった，まさに社会学的な実在であると考えられるのである。それが日常生活上の社会現象とはどのように異なっているのかについて，以下で考察してみたいと思う。

まず第一に，「社会意識」という概念は，日常生活においては，何ら確かな実体をもつものではない，という点である。それは，「意識」というものが，振る舞いや態度，表情などのように目に見えるものではないから，というだけではない。「意識」という個人的なものが，「社会」という主体において捉えられている，という点でも，日常的な感覚からは違和的なものなのである。

例えば見田宗介は次のように述べている。

「たしかに意識は，諸個人の脳髄以外に，その占めるべき現実的な場所をもたない。『社会』とか『集団』とかいう気味のわるい実体が，宙に浮いていたり，空気のなかにふくまれていたりするわけではない」(見田，1968→1976：p104)

一方で，ではそれは諸個人の意識の集合として捉えられるのか，というとそういうものでもない。もちろん，そういう理解の仕方もありうるだろう。例えば，戦後日本の「集団的に共有された心情」を研究しようとするある研究は，こう述べている。「いくつかの異なる階層や世代のひとびとの心情を総合すれば，同時代における共通経験を再構成することができる」(小熊，2002：p21)。しかしながら見田は，こう述べるのである。「社会意識は個人意識の，たんなる総和ではない」(見田，1968→1976：p103)。個人の「自我」や「パーソナリティ」が，「細胞や体液の相互作用の集合」に還元できないように，社会意識は，個人意識には還元できないと述べるのである。見田によれば，それは，「存在のより高次の相互作用の体系はつねに，それを一つの独自のレベルの体系たらしめる，固有の運動法則をもつ」(見田，1968→1976：p104)という原則に基づくことである。例えばあらゆる分野の研究を，原子物理学の，あるいはもっと微細な単位の研究に還元し尽くすことが，現在のところできないように，社会意識を個人意識の相互作用によって研究することはできないとされるのである。しかしながら一方で，社会学の内部においても，方法論的な集合主義と方法論的な個人主義は，長い対立の系譜があり，その決着は未だについていないとされる。

第二の点は，第一の点と矛盾するようであるが，「社会意識」という社会の捉え方は，多数性，あるいは複数性において社会を捉える捉え方である，という点である。すなわち，「社会意識」とは，しばしばひかれる簡明な定義では，「ある社会集団の成員に共有されている意識」とされているのであるが，しかし「共有」という言葉で連想されるような，一様な意識状態の共有や，あるいは個々人の意識のなかに共通性が見いだされる，というようなものではない。例えば，戦後日本の民主化の中での「旧意識」の残存の研究を行った日高六郎は，福武直と出版した社会学の教科書の中で，「世論」という項目において次のように述べている。

「1　すでにすべてのひとびとの意見が一致している問題については，世論のはたらく余地はない。…むしろ世論は，このような慣習や道義的信念や法律が，不安定になっているとき，すなわち無用の長物となるか，あるいは新しい価値のために動揺するようになったとき，はじめて要求され，成立し，その機能を発揮する。2　したがって世論の対象となるのは，論争的な問題である。世論は多数意見であるとしても，少数の意見をつねに予想している。」(福武・日高，1952：p230)

これは政治的なイシューについて意識的に形成された意見を対象とする「世論」についての議論であるが，より一般的な社会生活全般に関する，主観的な意識を意味するところの，社会意識についても，ほぼ同様に捉えられるだろう。即ち，「社会意識」というものは，一致していないもの，言い換えれば，常に複数の分布の中に捉えられるものなのである。

第一と第二の点は，従って次のように総合できるだろう。すなわち，社会意識というものは，集合的なデータの中に，分布として見いだされるものである。それは，一個人の意見を一つのサンプルとして捉え，複数の分布の中に位置づける形で分析する。

そこで私たちは，以下では，実際に社会意識がデータの中でどのように見いだされているのかを見てゆきたいと思う。その中で，社会意識研究が，調査技法として革新的であったということ，またそのような革新性が次第に失われてきた中で，一つの展開が社会意識論において試みられたことを見ることができるだろう。

## 2：農民意識の研究―福武直の調査

社会学において，戦後最も早く，実証的なデータを用いて社会意識の分析を行ったのは，福武直の農民意識の調査であった。福武直は，1953年と，1968年に，秋田県北秋田郡下小阿仁村と岡山県上道郡浮田村の二村の，各々二つの集落の全農家を対象として，農村社会の構造と農民意識に関する調査と，その追跡調査を行った。同調査は更にその17年後，1985年に，福武の指導を受けたとされる者たちによって再度，追跡調査が行われた。

この福武による農民意識の調査は，実証的なデータを用いた最初の社会意識の調査であったというばかりでなく，戦後日本の農村においてはじめて行われた，組織的・包括的な調査であったといえるだろう。私たちは，まず，このような調査がどのような目的と設計をもって行われたかを，概観してみたい。そのあとで更に，このような社会調査が行われたという，その社会的な事実に着目して，その点を考察してみたいと思う。

福武が行った最初の農村調査は，農地改革が完了してまもなくの時点で行われた。福武は，農地改革という制度上の改革が更に，農村の生活全般の民主化へと向かうことを理想とし，それがどの程度現実には実現されているのか，あるいは実現の可能性を胚胎しているのか，またそれを阻むものがあるとすればそれはどのようなものであるか，等の問題意識を持って調査に臨んだ。福武はこれを次のように表現している。

「われわれが基本的な焦点としたことは，彼らがその環境に対して何らかの矛盾を感じているかどうか，意識しているとすれば，これを諦観しているか，それとも積極的に打開しようとしているか，ということであった。また，人間の自由と平等の理想への道が一応進歩的であるとの立場に立って，農民の意見や態度がどれほど保守的であるか，どの程度進歩的な芽をはらんでいるか，という視点をもとろうとした」(福武・塚本，1954：p4)。

また福武は，「農民は，おくれた生産様式によって今なおある程度自給的農民として生活していると同時に，資本主義社会の中にまきこまれ商業的農民としての一面をもたざるを得ず，そこにいわゆる矛盾的性格を生じている」と考え，この差異と，またそれにも関わらず見いだされる共通的性格はどのようなものであるかを考察するために，より自給的と考えられる秋田の村と，より商業的と予測される岡山の村を，調査対象地として選出したのであると述べる。

福武の調査設計の特徴は，農民の意識調査と農村社会の構造分析との平行的な実施と，その各々の成果の関連による分析という技法である。

「われわれは，構造分析による主として質的な調査と質問紙による量的な調査とを相互に関連させて有機的にむすびあわせ，その有機的分析から農民の社会的性格を導出しようとした」(福武・塚本，1954：p8)

農村社会構造の質的分析は，「家族・同族から組・部落に及び，行政村全体にわたる詳細な聴取調査」という形をとるものであり，一方質問紙による調査は，二集落の全世帯主に対して「学生を動員して面接調査」を行うという形をとるものであった。これは，質問数が140にも及び，オープンアンサーを多くした複雑なもので，「必然的に申告方法よりも面接方法をとらざるをえない」ものとなったため，とされている。また，福武は，こうした二つの調査技法を組み合わせることについて，次のように述べている。

「このような質問紙法による劃一的応答は，背後の社会的諸条件を無視して機械的に集計されるばあい，きわめて危険なことがありうる。一例をあげれば，隣組制度に対する肯定・否定の答えも，現実に農民が経験している隣組制度の役割や拘束の程度の差によって説明されないと意外な誤りを生ずるのである」(福武・塚本，1954：p7)

すなわち，福武は，構造と意識が相互に影響を与えあうということを認めながらも，その各々が独自に存立していると考えているのであり，それゆえに，各々を別個に固有の調査技法を用いて分析し，しかしてその関連を考察するという思考の段取りをふむのである[3]。またこうした異種の方法論の併用は，農村の民主化という理念にみあった，未来への志向性を調査の中に導入することでもあった。即ち，福武の調査は，一方で，日本民俗学や農村社会学の伝統的な方法，村落内の有力な農家に対するヒアリングなどによって村落内の社会関係を明らかにする方法を取りながらも，更に新しい調査法，即ち規格化された質問紙による意識調査を行うものであった。もちろんそうした調査技法の重層性は，一つには，この調査が農林省との関係の中で企画され，農村改革のためのその後の諸政策の，基礎資料とされる可能性をもったものであるという位置づけから，改革の方向を定めるという意図をはらんだためであると考えられる。しかしながら構造分析という形で明らかにされる，農村の現在の社会関係に対して，相対的に独自に形成された農民意識が，農村の未来の民主化の方向を指し示すという捉え方は，農民意識に限らず，社会意識論全般に半ば無意識の前提として導入されるものとなったと考えられる。

## 3：意識調査という革新性

さて，以上のように私たちは，福武直による農民意識の調査の概要について，とりわけその理論的な基礎付けについて見てきたが，次に，このような調査技法が切り開いた，新しい社会空間について考察してみたいと思う。先に述べたように，福武の調査は，二つの調査技法を平行に用いていた。私たちは，福武が用いた二つの調査技法が，異なる対話的なデータ収集の技法[4]であることに着目し，各々の調査技法のデータ収集の現場を比較することで，意識調査という技法について分析してみたいと思う。

まず第一に私たちは，農村社会構造に関するデータの収集について見てみよう。このデータ収集は一つには，予備作業として，役場の諸種の統計や歴史的な資料，戸籍簿などにより，村の産業や家々の家系的な繋がりなどを調べることで，基礎的なデータを得るものとされているが，その上で本格的なデータの収集は，聞き取りによって行われるとされる。そしてこの本格的なデータの収集は，例えば，農村調査について解説した塚本によれば，まず，地主小作関係については地主に，また本家分家の関係については「事情にくわしい本家の古老に」(福武，1954：p52) などのような順に行われる。そして更に他の面接者を適宜選んで，その話を確かめる，というように進むのである。こうした仕方は，同じ本で都市調査について書いた中野卓が指摘するように，「同じ村のことなら他の家のこともほぼ，ものしりの人にきけばわかってしまう」(福武，1954 b：p110) という，生活を共同し，その社会関係が村落内に多く封鎖されているような農村でこそ，可能な

調査方法である。つまり，その構造の聞き取りは，まさに農村社会の構造に沿って行われる。

一方，意識調査は，こうした聞き取りとは別に，村民一人一人，あるいは家々を一つ一つまわって，標準化された質問紙をもとに，面接調査を行う。私たちが着目するのは，まずその標準化された平等さである。面接対象となった人々は，それが福武の調査のように世帯主のみにせよ，地主か小作か，あるいは本家か分家かに関わらず，一つの完結した意識を持った対象として，平等に扱われる。その意識が例えば革新的か保守的かは，収集後にデータを統計的に処理して初めてみることができるものになり，そこで人々は分布の中の一つの値をもったサンプルとして扱われる。この意識調査の特徴は，平等さという点では，その作業としての対話自体が民主的であるともいえるが，一方で，それが標準化された質問に対する答えという形で，誰彼をもひとしなみに扱っているという点で，批判の対象ともなってきた点である。例えば，福武直が市役所の依頼で行った，岡山県倉敷市の水島石油化学コンビナートの公害地域の，住民の生活と意識の調査に参加した中野卓は，次のようにこれを批判している。

「具体的な人間は，村人といえども個性をもつ個人である。農業技術にせよ農政にせよ，それを具体的にどう受けとめるかは生産者，生活者，行為主体としての村人個々人である」（中野，1983→2003：p47）

そして中野は，「質問紙法による調査の流行に見られるような数量化あるいは量化測定こそが『科学的』である唯一の道と心得」るようなやり方は，個性ある個人を総体として取り扱うことができていないと批判し，個人の人生の歴史をモノグラフとして集積する方法，すなわち「生活史」という方法の意義を主張するのである。実際に，中野は，この水島調査の調査票のチェックの作業の中で，一つの特異な回答に着目し，その対象者を探して，その生活史を聞き取り，『口述の生活史』として一冊のモノグラフにまとめるのである。ただ私たちは，この中野の調査対象者となった個性ある個人が，標準化された大量調査の特異な回答として見いだされたこと，まただからといって中野が他の回答者を，個性のない存在と見ているわけではないことに注目しておきたい。

次に私たちが着目したいのは，意識調査が前提とする私秘性である。例えば農村調査について書いた塚本は，次のように注意を促す。

「態度調査などの場合，とくに農民においては，本家や地主などの周囲に気兼ねして，本当の気持ちをなかなかいわないことが多く，…私達としては，そうした障害をのりこえて，よりよい調査をしてゆくためのいくつかの必要のひとつとして，他人にもらすべからざることはもらさないという細心の心づかいと，これが研究上必要な作業であるという確信を私たち自身の面接態度のうちに示して信頼をうるようにする方法のあることを，この作業では特に忘れてはなるまい」（福武，1954ｂ：p62）

すなわち，ここで意識とは，社会関係とは独立のもの，むしろ社会関係の中で抑圧されているものとして，捉えられている。したがって，個々人の意識を対話の中で取り上げること自体が，このような抑圧を明らかにし，人々をそこから解放する一助となるような，革新的なことといえるのである。これを実現するのが，当該の関係者の利害から（一応は）独立した，第三者としての研究者集団との社会関係ということになる。

さて私たちは，福武の用いた二つの対話によるデータ収集の方法を比較する中で，意識調査という技法が，標準化された平等さと私秘性において個々人を扱う特殊な対話の仕方であることを見てきたと思う。それは，農村の構造から独立した，調査員と個々の農民という新しい社会関係の体験であったというばかりでなく，固有な意識を持った個人として他者から見られること，そうした視線で自らをも見いだすことによって，特殊な新しい社会関係のあり方，そして社会のあり方を体験することでもあったと考えられる。

## 4：都市化された社会の意識調査
## ―ひとつの転回点

さて私たちは以上で，福武直の，農村社会の構造分析と重層された，農民意識の調査について見てきた。ところで，福武の調査は，15年を隔てて二度行われたのであるが，その間にも，そして，福武の指導を受けた者たちによって行われた，17年後の第三次調査においてはより顕著に見られたのが，経済の高度成長と，それに伴う社会の全般的な都市化の影響であった。第一次調査の折に希望的に展望された，農地改革が生み出した自作農秩序が，近代的な企業的農業経営へと発展するという見通しは失われ，「むらの解体」とともに，兼業化や出稼ぎ，挙家離村や過疎問題などの矛盾が深化していくのである。最初の調査においては，福武は，農村の民主化という理念を，個々の農民が生産者として主体化することと，またそのような主体性が確立された生産者が，互いに個々の利害に基づいて平等に結合するという，「組合的原則」（福武，1954ａ：p492）によって結びつけられることにおいて，実現されるものとして期待していた。しかしながら現実は，地主制，身分制の桎梏や相対的過剰人口などの問題からの解放が進んだ後も，農村はそうした期待に添って展開するものとはならなかったのである。

そしてかつ，こうした変化は，福武の編み出した調

査のあり方についても，その有効性を失わせていったと考えられる。それはまず，「むらの解体」と指摘されるような事態に伴う，農村社会の構造分析において，自覚されたことであったようだ。例えば中野卓は，「都市社会における生活史の研究」という論文の中で，次のように述べている。

「現代の日本都市社会の構成単位はもはや家ではなく世帯ないし個人だとすれば，日本近代から日本現代への構造変動をたどる方法は，個々の個人の歴史，彼らが家そして家族からどのように自立して個人になっていき，彼ら自身の家族を作り，どのように生きどのように死んでいくかという『個人史』life historyのモノグラフを記述することを介してのみ，『構築的に理論化』しうるということになるであろう」（中野，1987→2003：p63）

中野は，個々の家や同族団の生活の歴史についてのモノグラフ的研究から，個人の「生活史」のモノグラフへと，その研究方法を転回した理由について，以上のように述べているのである。都市化の進展は，鈴木榮太郎の言う「自然村的秩序」を解体し，農村を混住社会とした。そうした農村の構造の解体は，構造分析のための聞き取り調査の前提とする秩序の解体であった。

このような構造分析の解体は，一方で，意識調査の困難をも生み出した。意識を共有していると了解できるような，共同性をもった社会集団が見いだせなくなるということは，社会意識という社会的事実自体の存立に関わる事態である。このような困難に対する新しい，社会意識論の可能性を見いだそうとしたのが，見田宗介の行った方法論的展開であったと考えられる。そこで次に私たちは，見田宗介の『現代社会の社会意識』の冒頭の論文「まなざしの地獄」を取り上げてみたいと思う[5]。

## 5：「個人」の「質的データ」という戦略

さて，私たちは，福武の農民意識の調査が，現代社会の都市化の進展の中で，方法的な有効性を失ってきたことを見たと思う。それは同時に，福武の描いた民主化の理念の実現の仕方における失効でもあった。それは次の二点においてそうであったといえる。まず一つは，福武の，農民の生産者としての主体性の確立，という予測であるが，これは，他産業への多就業などの形で豊かになってきた農家においては，都市における労働者と同様に，生産者としての主体性の確立ということが困難となったことで，失効してしまった。そしてもう一つは，主体性を確立した個人の間での，共同性の再構成，という予測であるが，それは，このような共同性の基盤となるような既存の共同体が解体してしまったことで，やはり失効してしまった。多くの社会意識論の関心は，こうした社会の変化の中で，マス・コミュニケーション論などの，消費者としての主体性の問題へ，あるいは，管理社会化の中での，アパシーやマイホーム主義などのプライヴァタイセーションの問題へと，移行することで，新しい社会状況の分析を試みていた（宮島1983）。そうした研究では，しばしば，福武の研究の初発の理念は，欧米型の民主化的近代化のコースをそのまま踏襲したもので，もはや当時の日本の状況には適合しないものと見なされていた。

ところが，見田宗介は，このような社会変化に伴う，福武の編み出した，農村社会の構造分析と農民意識調査の重層という研究方法の困難を，福武の初発の理念を継承しながら，現代日本の社会意識研究において解消しようとしたと考えられるのである。それを可能にしたのは，「個人」の「質的データ」を，意識調査において積極的に活用するという，研究方法の展開であった。私たちはまず，見田におけるこのような方法の継承と展開について見てゆきたいと思う。

見田は，まず，都市的な対他関係が基礎となる社会において，社会の構造分析にあたるものを次のように捉え直す。すなわち，農村の構造分析に対しては，もはや人々の生産や生活を成り立たせているのが，自然村の封鎖的な社会関係ではなく，グローバルに拡大したゲゼルシャフトリッヒな社会関係であることから，『現代社会の存立構造』のような，資本制社会全域の構造の分析が行われるのである。

「現代社会を，その最も抽象的な規定性においてみるならば，それは諸個人の共同態的な（gemeinschaftlich）な関係ではなく，集合態的（gesellschaftlich）な連関を機軸とする社会である。諸個人の存在におけるこのような基底的な性格規定は，したがってまた，この社会に生きる諸個人の意識の基底をも，汎通的に規定している」（見田，1979：p58）

そしてそうした全体社会の客観的な構造に対して，一個の完結した意識を持った個人が見いだす主観的な意味や価値が，個々人の固有な個性において追求されるのである。例えば「まなざしの地獄」の論文の冒頭で見田はこう述べる。

「都市とはたとえば，二つとか五つとかの階級や地域の構成する沈黙の建造物ではない。都市とは，ひとりひとりの『尽きなく存在し』ようとする人間たちの，無数のひしめき合う個別性，行為や関係の還元不可能な絶対性の，密集したある連関の総体性である」（見田，1973：p1）

見田はこうした現代社会における個人を捉えるためには，従来の社会調査のような，標準化された質問に対する応答を，大量に得る調査だけでなく，個人に関する「質的な」データの分析が重要であると考えるのである。即ち，社会の構造が，具体的な地域社会の実態を見るばかりでなく，存立構造としてより目に見えにくい，深層にある構造として捉え直されたように，個人についても，具体的な生活上の問題をめぐる意見や感想などの形で明らかにされるよりも，より深層の主体の構造を明らかにするための意識論が必要であるという形で，展開されるのである。では，実際には，このような個人を分析の焦点とする社会意識論を可能にするために，どのようなデータが，どのように分析されているのだろうか。「まなざしの地獄」にこれを見てみたいと思う。

この論文は，1968年に三件の連続射殺事件を起こしたとして逮捕された死刑囚が，獄中つづり，出版された手記を，主題的な資料として，現代社会を生きる諸個人一般の意識構造を分析する論文である。その中ではまた，労働省などの諸種の官庁統計が引用され，手記に描かれたような意識の存在が，高度経済成長の中で中卒で集団就職した青年たちの意識の一例として捉えられ，いかにそれが社会的には「見えない」ものとされているかが明らかにされるのである。即ち，個人の「質的」なデータを中心としながらも，それが統計的な資料による分析と組み合わされて，個人の深層の意識構造が明らかにされるのである。この二つのデータの重層について，見田はまた同論文が収録された著作の他の論文で，次のような方法論的な考察を行っている。

即ちまず見田は，社会意識研究の二つの方法として，世論調査のような「数量的」なデータに基づく方法と，手記や自伝，流行歌や文学作品のような「質的」データを資料とする方法とあると分類する。そして，「質的」データが，「量的」データに対して，「代表性」と分析手順の「標準化」の点で難があるとされてきたこと，しかしながら「量的」データも，追体験的な了解可能性の希薄さや，総合的・多次元的な把握の困難，変化のプロセスや可能性に関する動的な把握の困難などの，弱点を持っていることを指摘する。即ち，二つのデータは，より仮説探索的な用い方と，より仮説検証的な用い方によって，互いの欠点を補うものと考えられているのである。

しかしながら，二つのデータの分類を行った本来の意義は，二つのデータの資料的な形態の分類にあるのではなく，データの扱い方の違いにあると考えられる。即ち，資料を，その「平均」の部分に着目して扱う「数量的」なデータに対して，「質的」であることの意味は，各々の固有性，個人の個性の部分に着目して扱うことにあると考えられる。例えば，見田はアメリカの社会心理学において，質的なデータ分析の抱える，解釈の恣意性や分析手順の標準化の困難という問題を，科学的に妥当なものとするために行われた，次のような試みを取り上げる。それは，判定者がチームを組んで，多数意見に近い意見を多く述べる判定者を，その「信頼性が高い」という形で得点化するという形で，より「平均」に近い解釈を得ようとする試みである。この技法について，見田は次のように述べる。

「私はけっして，これらの手続きを批判しようとしているのではない。キャプランとゴールドセンのやり方は，一つの有効なテクニックである。なぜ有効なテクニックであるか。それは数量的分析において用いられるからである。それではこれらの数量的な社会心理学のテクニックでは，質的な規定性はどこに位置づけされているのか。それは数量的な評価のワクグミとなる次元及びカテゴリーとして存在している。すなわちこれらのテクニックにおいては，質的な次元及びカテゴリーがあらかじめ前提されており，その上に立って数量的な評定が行われる。

これに反して質的なデータ分析においては，データから次元あるいはカテゴリーを引き出すことそれ自体が課題となる」（見田，1979：p172）

すなわち見田によれば，このような質的なデータ分析においては，「平均的」あるいは「最大公約数的」な解釈が採用されるのではなく，むしろ解釈者の個性こそが重要な役割を果たすことになる。すなわち数量的なデータ分析においては解釈者の個性を抹消することが課題となるのに対し，質的なデータ分析では，解釈者のその個性こそが分析の技法となるのである。

私たちは前に，福武の意識調査が，標準化された平等さによって，民主化を実現しようとしていたこと，その点でこそ，意識調査が社会的な体験として革新的であったことを見た。しかしそうした形で民主性や革新性を得ることは，もはや現代社会においては不可能であると考えられる。ゲゼルシャフト的な社会関係が基礎となる，基本的に都市化された社会においては，もはやそのような共同体の抑圧ということは問題にならない。むしろ，画一化された管理こそが，新しい抑圧，あるいは疎外として人々に感受されているのであり，標準化された平等さは，調査対象者にとって，むしろそのような生活世界の一端に位置づけられてしまうであろう。個人を個性として捉え，分析にもそれを活用すること，それが現代社会における民主的な，あるいは革新的な調査として，見田において考案されたのだと考えられるのである。

ではこのような意識調査の展開は，どのような理念に基づいて行われたのであろうか。次ではその点についての考察を試みたい。

## 6：理念の展開

私たちは，福武直の農民意識調査が，農村の民主化という理念に基づいて行われ，その具体的な実現の方向性としては，農民が生産者として主体化すること，そしてそのような主体性を確立した生産者が個別の利害に基づいて，組合的に結合することとして捉えられており，そのような変化は，既存の共同体の改革として目指されていたことを見てきた。こうした変革の方向性は，福武自身の再調査の中でも，すでに失効しつつあることが気づかれていたものである。しかしながら見田宗介は，先に描いたような方法論的展開を行うことで，この理念をより現代社会に適合する形で，継承したと考えられる。見田の社会意識論を導いている理念が，福武の初発のそれをどう継承し，どのような点において異なったものとなっているのかを，以下で見てゆきたいと思う。

まず第一に，福武が，意識調査を行うことで，そこに未来の政策介入の基礎資料を見いだそうとしたことから考えてみたい。福武においては，意識調査によって農民の，社会関係によって抑圧されている希望や欲求が明らかにされれば，その実現をより民主的な形で行うことができると期待されていた。それはむろん，ただ社会関係による抑圧を，匿名性や私秘性などの形で小さくすれば明らかになるというものではなく，一方で農民個人の側の主体性が確立されること，すなわち，自らの利害を知り，その実現を求める姿勢が確立されてくることが，前提とならなければならない。意識調査とは，それを計るものでもあった。

しかしながら，見田が対象とした，基本的に都市化された現代社会においては，そのような主体性の捉え方，また個別な利害の実現を，より広く，より「平均的に」実現するという形での民主化的近代化の路線は，もはや現実的なものではなかった。見田が「現代における不幸の諸類型」で描き出したように，人々は現代社会において，自らの利害を社会関係の中でいかに自由に追求できるかという手段の点よりも，むしろ自らの意味や価値をどうしたら得られるのか，という目的の点で，困難を抱えていると考えられたのである[6]。従って，見田における民主化とは，福武が描いたような，人々の個別の利害をより多く，より広く実現するという形で達成されるものではなく，まず人々が，どのような価値を追求することで幸福を得ることができるのか，という点における困難を考えなくてはならなかったと言えるだろう。しかしながらこれは単に，それを順に解決すれば，社会集団に対する政策方針を選択する基準を得ることができるというものではない。見田の『現代社会の社会意識』の最後の論文，「価値空間と行動決定」は，「社会的価値のアポリア」と「個人的価値のアポリア」の相同的な存立について，次のように述べている。

「アロウの意味での『社会的厚生関数』，すなわち諸個人の選考（評価）を基礎に，非独裁的な仕方で，社会的な選択をつねに一意的に決定するようなてつづきが存在しえないという論証と，論理的にはまったく同型に，一個人の内なるさまざまな価値次元を基礎に，特定の価値次元による他の諸価値の『きりすて』を行わないような仕方で，行動をつねに一意的に決定するような基準というものは存在しない」（見田，1979：p229）

「数量的」な社会意識に関するデータは，複数の選択肢の分布という形で，諸個人の間の利害の対立を明らかにする。すなわち，通訳不可能な諸種の価値の対立を，社会の中に見いだすのである。このような対立は，既存の社会構造を前提とした「数量的」なデータからは，解決不可能なものとして見えてしまうと見田は述べる。そのために，このような対立が生み出される暗黙の前提となっている，社会構造を明らかにするために，現代社会の深層を規定している「構造分析」が行われるのである。そしてこれ相同的な困難を抱えている主体の問題が，「現代社会の実存構造」として分析され，またその克服が『人間解放の理論のために』のような「現代社会の主体構造」として構想されるのである。「個人」の「質的」なデータは，そのような分析において必要となる。それは，既存の価値観を前提としたカテゴリー構成による「数量的な」調査では，明らかにできないような深層の構造を明らかにするために用いられるのである。

第二に，共同性の問題について見てゆきたい。福武は，農村の民主化という課題を，既存の農村共同体を民主的な構造へと改革することと捉えていたが，この構想は，人々の生活圏の広域化・分散化，それに伴う農村の混住化によって，現実性を失っていた。見田は，既存の共同体が実質を失った，基本的に都市化された社会における，社会意識論を構想したが，このとき，共同性の問題は，まず諸個人の意識の中に求められるものとして，いったんは既存の共同体からは解放された形で探求されるのである。ただしこのような共同性への志向は，現実には，「即自的・媒介的」に存立するゲゼルシャフト的な社会関係によって，他者との関係の全体的な連関には無関心な私的な利害の追求と，これを一見超越したかのように見える諸種の社会法則とに分断され，疎外されている。見田は，このようなゲゼルシャフト関係を基礎とする現代社会の構造について，次のように述べている。

「すなわち定義風におさえておけば，諸個人の意識それ自体の内部にある共同性への志向に基づいて存立す

る社会（共同態 gemeinschaft）とは対照的に，私的な幸福を追求する主体としての諸個人が，そのせめぎ合い自体の結果として，一定の『社会的』な法則性を，彼ら自身の意識から独立した客観性として貫徹せしめ，この法則を媒介として諸個人の共同性が結果的に実現するという，即自的，媒介的な存立の構造をもつ社会の形態である」。（見田，1979：p62）

したがって，このような社会関係が基礎となるような社会に対しては，それを変革するような新しい社会関係のあり方は，次のようなものとして呈示される。一つには，その社会関係が，調査者，被調査者双方にとって，互いが巻き込まれている諸種の社会関係の疎遠な連関の総体を「対自化」する契機となるようなものであること，そしてもう一つには，「抑圧された意味の諸次元」を回復し，「個体的な現実性」を取り戻すようなものであることである。見田が新しく展開した，「個人」の「質的」なデータ分析という技法は，このような関係の回復の一端として，戦略的に位置づけられていると考えられる。データとなる事象から，当該者が即自的に巻き込まれている，疎遠で広範な連関を全体として見いだすこと，そして，データの持つ意味の多元性を，分析者が一つのデータとの関わりのなかで総体として体験すること，それが，現代社会の構造分析と，社会意識論の，調査という技法の中で実現する革新性であり，戦略であると考えられる。

## 7：社会意識論という方法

さて，以上のように私たちは，戦後日本の社会学における社会意識論の，福武直という一つの原型と，見田宗介という一つの展開を見てきた。その二つの比較の中で，私たちは，各々の社会意識論が，その折設計され，実施された社会調査法と深く結びついて展開されていたこと，またそのような調査や分析の技法は，現実社会の構造の認識に基づき，それに対して戦略的に用いられていたことを見たと思う。最後に私たちは，二つの社会意識論を通底して用いられていた，社会意識という概念が（その特徴については2節で既に見たが），現在も社会学において用いられることにおける意義を，考察してみたいと思う。

まず一つには，マイノリティへの視線という点である。私たちは，「数量的データ」に基づく社会意識の捉え方が，「標準化された平等」という手続きを踏んで，人々の回答を，分布の中の一つの値として位置づけるものであることを見ておいた。そのような「数量的データ」は，一方で，「平均」やあるいは多数派に着目して分析されてきたが，一方で，少数派や外れ値に見えるような特異な回答の存在を示すものとしても，用いられてきた。例えば先に3節で触れておいた，水島コンビナートの公害調査での，中野卓の『口述の生活史』の試みである。このようなマイノリティの存在は，福武が構造分析で用いたような，質的な調査では，見いだすことが困難な存在である。「標準化された平等」という手続きを踏んでこそ，こうした存在は資料化され，目に見えるものとなる。それは一つには現在の社会においても，やはり日常において語ることを抑圧されているような「声なき声」を見いだすこと，あるいは，多数決の中で切り捨てられるような存在への視線を保持することで，既存のマジョリティの秩序を批判し，その変革を求める力を見いだすことのできるものである。

そしてまた，このような視線を得ることは，むしろ現代にいたるほどに，より重要になっていると考えられる。というのは，ゲゼルシャフト的な社会関係が基礎となる現代社会においては，分布上の個々の値相互の関係は，もはやその内部においては，見えないものとなっているからである。現代において私たちは，自閉的な共同体社会においてなら自明なものであったような，自らの選択が本当にマジョリティのものなのか，他の人々の選択とどう連関しているのかということについて，ほとんど知ることができない。例えば，高度成長の中で「金の卵」と呼ばれた，都市へ流入する青年の存在やそれを生み出すメカニズムは，当事者の主観だけからでは知ることはできない。自らがその一員であったことさえ，諸種の統計上の結果を通してはじめて気づかれるものとなるのである。「標準化された平等」という手続き自体は，もはや革新的とは言えないが，しかし切り捨てられ，見えないものとされている選択肢やマイノリティの存在との関係は，むしろより疎遠で気づかれないものとなっていると考えられる。

もう一つの点は，未来という時間を，研究の中で本来的なものとして位置づけるという点である。例えば，福武と見田の社会意識論は，直面する社会状態の違いによる具体的な実現の仕方は異なっていたとはいえ，未来という時間を，主体的な実践の領域として解放する，ということを理念とする点では，共通するものであった。社会意識とは，このようなよりよい未来を構想するべき領域として捉えられ，その抑圧が，あるいはそこからの疎外が問題とされるのである。現実を否定し，よりよい社会状態を構想する基礎も，そしてまたそれを実現する場としての共同性の領域も，いずれもその中に探索される。例えばP．ブルデューは，「資本主義のハビトゥス」の特徴が，「抽象的な未来への志向」であること，それが社会の中に導入されることが伝統社会的な秩序の解体となること，そしてまた資本主義化された社会においては，そのような未来への計画が可能であるかどうかが，階級を分ける鍵となることを，アルジェリアの研究において指摘している[7]。すなわち，未来の計算可能性とそれに基づく現在の生活の設計が，近代社会の基礎となる主体の性向なのであ

り，したがって，どのような未来を志向するのか，という点についての思考を可能にすることこそが，現在の社会を生きることにおいて重要なモメントでもあり，その改革についても同様なのである。

そしてまた，この未来の解放という課題も，現在に至るほど困難なものであると考えられるのである。例えば見田は，マンハイムの『イデオロギーとユートピア』について触れながら，そこに描かれた「ユートピアの終焉」という「陰鬱な展望」について，未来への構想力の退化は，実践のモメントを失うこと，即ち歴史的な行為の退化であることを述べている（見田，1979：p182)。マンハイムは「長い間の発展のあとで自覚の最高の段階に到達した人間」が，「歴史への意志と歴史への展望を失う」と述べているが，私たちはむしろ，例えば，未来の実践についての無力感にとらわれているか，あるいは逆に未来が鉄道の軌道のように決まり切っていて，そこを走るかそこから脱落するか，という選択しか見えないような状態こそ，リアルに感じられるのではないだろうか。私たちは，例えば高度経済成長の頃，おそらく抱いていたであろう未来への展望を，現在失っているのではないだろうか。

したがって，私たちは以上の二つの点において，現在の社会において，社会意識論は新たな意義をもっていると述べることができる。しかしながら一方で，現在における社会意識論は，新しい社会構造論を要請しているのではないか，とも考えられるが，その点については，今後の課題としたい。

## 「注」

1　実証的研究方法については，「質的」調査と「数量的」調査，という研究方法や，データの形態についての分類の仕方が一般的にあるが，その分類の仕方が，後にアンケート調査とケーススタディとの対比などの，多様な二項分類と重ね合わされて，安田三郎と見田宗介の間で行われた，いずれの技法が優れているかという議論になったり，あるいは佐藤健二による，そうした重ね合わせが混乱を生んだとの批判がなされたりした。後に福武直の農村社会構造の「質的」調査と，農民意識の「量的」調査について取り上げるが，こうした研究方法の分類の構図を与えたのは，福武の調査の設計であったと考えられる。

2　中筋由紀子「インタビューという技法について」。

3　このような構造と意識の関係についての捉え方は，福武直独自のものであると考えられる。例えば，労働者の意識調査について高橋徹が書いた文章は次のように述べている。「たとえば『日本労働者におけるプロレタリアート意識の成熟度』を調査するばあいには，…三つの相異なる対象を選び，それらについて比較的方法による調査分析を行うならば，プロレタリアート意識とそれを規定する客観的な構造的条件との関係は，ヨリーそう条件発生的に確定されるに違いありません」（福武編，1954ｂ：p133)。また福武の用いる「構造分析」という言葉は，有賀喜左衛門にヒントを得たものと思われ(有賀喜左衛門の還暦記念論文集である『家―その構造分析』などを見ても)，モノグラフ的な研究方法との関連で用いられていると考えられる。福武の「構造分析」については，蓮見音彦「戦後農村社会学の射程」，あるいはよりマルクス主義の影響を低く評価したものとして，中筋直哉「地域社会学における地方自治体の現代的課題」。

4　この言葉は，佐藤健二による（石川他，1998：p274)。佐藤健二は，同論文で，フィールド学としての社会科学の特質が，説明すべきテキストづくりから始めなければならない点にあるということを指摘し，このテキストの特質を，収集の方法の違いによって，観察によるもの／対話によるもの／記録・資料によるものの三つに分類している。

5　見田宗介には，社会意識論に関する著作が，『現代日本の精神構造』『近代日本の心情と論理』等いくつかあるが，ここで特に『現代社会の社会意識』をとりあげるのは，それがまず，見田の社会意識論についての，現在の所，最後の著作であること，そこには，それ以前に見田が行ってきた社会意識論研究の，とくに「質的データ」「数量的データ」という分析方法に関する総論的な著作であることなどによる。

6　見田は，このような人々のあり方を，「人間の日々の関心が，人間にとって非本来的な価値にとらわれている状態」，すなわち〈意識の疎外〉と捉えている（見田，1965：p54)。このような生きる目的自体に困難や混乱を感じることが，現代社会に広く見られることは，例えばベラーの『心の習慣』を見ても気づかれることである。

7　P．ブルデュー『資本主義のハビトゥス』。

## 「引用文献」


Bellah, R.N., et al., *Habits of the Heart*., 1985.→『心の習慣 アメリカ個人主義のゆくえ』島薗進・中村圭志訳，みすず書房，1991年.

Bourdieu, P., *Algerie 60 structures economiques et structures temporelles*., 1977.→『資本主義のハビトゥス』原山哲訳，藤原書店，1993年.

蓮見音彦「戦後農村社会学の射程」『社会学評論』第２号第39巻，1964年，p167-180.

福武直・塚本哲人『日本農民の社会的性格』有斐閣，1954年.

福武直編『日本農村の構造分析』東京大学出版会，1954年ａ.

福武直編『社会調査の方法』有斐閣，1954年ｂ.

福武直編『農民社会と農民意識―十五年間の変動分析―』有斐閣，1972年.

石川淳志・佐藤健二・山田一成編『見えないものを見る力』八千代出版，1998年.

喜多野清一・岡田謙編『家―その構造分析』創文社，1959年.

真木悠介『現代社会の存立構造』筑摩書房，1977年.

見田宗介『現代日本の精神構造』弘文堂，1965年.

見田宗介「まなざしの地獄」1973年→『現代社会の社会意識』弘文堂，1979年.

宮島喬『現代社会意識論』日本評論社，1983年.

中野卓『中野卓著作集生活史シリーズ１巻　生活史の研究』東信堂，2003年.

中筋直哉「地域社会学における地方自治体研究の現代的課題」『社会史林』第47巻第３号，法政大学社会学部学会，2001年，p61-74.

中筋由紀子「インタビューという技法について」『愛知教育大学研究報告』第51輯（人文・社会科学編）2002年，p161-167.

高橋明善・蓮見音彦・山本英治編，1992年『農村社会の変貌と農民意識―30年間の変動分析』東京大学出版会.


（平成15年９月10日受理）